環境学習会を通じてクリークの多様な役割を伝える活動

Succession of the Roles of the Creek through the Environmental Study

○加藤修一※　佐田俊彦※※　古田栄次※※　赤松洋児※※
Kato Shuichi　Sada Toshihiko　Furuta Eiji　Akamatsu Youji

1　はじめに

現在、佐賀県の東部に位置する国営筑後川下流右岸農地防災事業等によってクリークの再整備が進められているが，整備後のクリークの維持管理や環境保全活動の裾野を広げていくため，クリークの有する多様な役割を地域住民に伝えることは重要なことと考える。この一端として次世代の地域の担い手である子どもたちが，クリークの多様な役割を現地において学び，クリークに対する理解を深めてもらうことに着目し，環境学習会（以下，学習会）を実施した。実施後，小学校校長や担任教諭からコメントを頂き，学習会の成果及び留意点等の取りまとめを行ったので，以下に報告する。

2　環境学習会の実施内容

本地区における学習会は,クリークに隣接した小学校の主に小学 4 年生を対象に，平成 26 年度 1 校，平成 27 年度 3 校，平成 28 年度 4 校において実施した。実施プログラムは，工事現場における学習会，クリーク周辺の環境点検とワークショップ方式（以下，WS）による点検地図作成の 2 パターンを基本とし,工事の実施状況や担任教諭の要望等を打合せの上,日時や実施内容，プログラムなどの詳細を決定した。

（写真－1）工事現場の学習会

(1)工事現場では,クリーク整備工事の水替時に併せて実施し,クリークに棲む生物やゴミの出現状況,クリークの工事の必要性などについて,クイズを取り入れながら学習した(写真－1)。

(2)環境点検では，7～8 名のグループを編成し，小学校周辺のクリークを対象として環境点検で見て回り，その後教室において WS を活用した点検マップの作成を行い（写真－2)，グループ単位で発表した（写真－3)。

（写真－2）点検マップ作成作業

3　小学校校長や担任教諭からの主なコメント

小学校校長等からは，以下のようなコメントを頂いた。

(1)学習会後，以前とは異なって実感としてクリークに興味を持つようになり，ゴミや環境問題に対して関心が高くなった。

また，帰宅後に家族に学習経験を話すことにより，家族もクリークに対して関心を抱くようになった。

（写真－3）成果の発表

(2)子どもたち自らが外を歩いて環境点検を行い，自主的に点検マップを作成したことで，今まで見過ごしていた施設の役割に新たな発見をした。また，みんなで力を合わせた共同作業は貴重な体験となり，大きな

所属：※北陸農政局信濃川水系土地改良調査管理事務所※※九州農政局筑後川下流右岸農地防災事業所
（所属は，平成 29 年 3 月時点）キーワード：クリーク，ワークショップ，環境学習，点検マップ，ESD

喜びや達成感を得るとともに，自信を持った様子だった。
(3)学習会の点検マップや写真を校内の廊下に掲示することにより，自分たちが中心となって授業に参加したという意識が醸成され，更にほかの学年の子どもたちもクリークに関心を抱くようになった。環境点検やWSを取り入れた方法は，これからも継続して欲しい。

４　環境学習会の実施成果

学習会の実施成果として，以下のことがあげられる。
(1)クリークを直接見に行くことで，その水は有明海へ流れていること，用水路に設置している除塵機によりゴミを除去していること，土地改良区が施設を大切に管理していることに加え，クリークが人々の暮らしに役立っていることを認識させることができた。
(2)さらに，子どもたちが自分たちなりにクリーク周辺を「見て」「感じ」た成果を環境点検マップとして発表することができた。
(3)野外において生物を直接手に触れ，観察することにより，ニッポンバラタナゴなどの名前を覚えた子どもたちが多く，クリークや生きものを身近に感じさせることができた。
(4)施工業者も含めた事前の安全管理の打合せと準備，環境点検において選定したルートの事前の施設の状況や危険な場所などの安全確認を行い，事故がなく終了できた。
(5)クリーク周辺に位置している水門や除塵機などの農業施設について，事業所及び土地改良区職員が施設の役割についてわかりやすく説明を行ったことは，効果的であった。
(6)地元テレビ局が取材に来てニュースで放映されたことは，地域でも話題となった。今後もこのようなメディアを活用することは重要である。

５　今後の留意点

今後，一層学習会の効果を上げていくためには、以下の点に留意して進める必要がある。
(1)4年生の地域学習のカリキュラムに併せて環境学習会を設定することは，学校側の負担も少なく，今後実施する場合，できる限り早い時点で学校側と連絡を取り，カリキュラムを把握の上，開催日時やプログラムの調整を図ることが効果的である。
(2)当日の開始前の説明だけでは，子どもたちが自主的に環境点検を進めることは難しいため，案内役が事前に現地を周知の上，自ら気づき自由に意見を述べることができる雰囲気づくりと点検への関心が高まるような工夫を考える必要がある。
(3)子供を通じて家族へもクリークへの関心を喚起するという波及効果も考えられ，今後は環境学習会における授業参観も検討する必要がある。
(4)野外での学習と農作業の時間が重なる場合は，農家の作業状況に関する情報収集や情報提供をするなど，事前に農家へ環境学習会の実施予定を周知する必要がある。
(5)これまで好天に恵まれたが，降雨を想定したプログラムの事前準備が必要である。

６　おわりに

これまでの学習会では，地域・自然との「関係性」を大切にできる個人を育てることを目的とし，本地区において整備工事を実施しているクリークを活用することにより，知識として教えるだけではなく，自ら考えて主体的に働きかける個人を育むために，ESD（持続可能な開発のための教育）を意識して「体験して学ぶ」方法を重点として行った。学習会後のふりかえりにおいて，子どもたちの反応や小学校校長及び担任教諭からも高い評価を得ており，学習会の意義は伝わったものと考え，他の市町に対しても特にクリークに隣接した小学校を対象として学習会の働きかけを行っていきたいと考えている。